校長室だより～燦燦～ №３３９

人望力

2021.4.8

ちょっと古いデータになるが、ＯＥＣＤが２００９年に実施した「生徒の学習到達度調査」における統計で、興味深い数字がある。

「ほとんどの教員が生徒のためを思っている」という設問に対して生徒が回答しているのだが、「強くそう思う」「そう思う」という回答はＯＥＣＤの平均で６６％である。６割以上の生徒が、「先生は自分たち生徒のことを思ってくれている」と感じている。ところが、日本はというと、なんと２８％なのである。

これは、いったいどういうことなのか。実際は、この数字をはるかに上回る先生方が生徒のことを思っているのではなかろうか。なぜ生徒はそう感じないのか。もしかしたら、先生方は一生懸命日々努力を重ねているが、その方向性に課題があるのではないか。

例えば、以前、受験のために歴史などの授業時間を英語や数学に振り替えた高校が問題になったことがある。目的のためなら手段を選ばなくてよいという姿勢では、受験に成功したとしても、生徒は先生方のことをどう思うだろうか。

「筆塚」というものがある。これは寺子屋の先生が亡くなったときに、教え子たちがお金を出し合ってつくるものである。これが全国各地にたくさん残っている。お金を出して先生の遺徳を偲び石碑を建てる。

例えば、ある寺子屋に１か月に３文字しか覚えられない子がいた。寺子屋の師匠は、その子が生きていく手立てを見つけてあげたいと酒薦（さかごも）書きを勧める。お酒の樽に貼るラベルの独特な文字のことである。その子は、後に江戸でも評判の酒薦書きになった。

この師匠はすべての教え子にこういう愛情をかけた。だから、慕われ敬われ、筆塚が建つわけである。おそらくこの寺子屋の師匠は、現代の高校の教員よりも知識は、はるかに劣っていたであろう。それでも寺子屋の師匠に人望があった理由は、その能力ではなく人間性にあったのではないか。能力がある、それだけでは人はついてこない。

教育現場だけではない。様々な分野で、能力はある、実績もあるのに、なぜかうまくいかないという人がいる。その原因は、人望の力の有無にあるのではないか。「人望力」は能力というよりは、心構えであったり志であったり、他人を思いやる気持ちといった誰もが心がければ身に付くものである。いわば、剣道や柔道、あるいは茶道などにある「型」である。こういうときはこう言えばいいといったテクニックとしての表面的な型ではなく「こういう人間でありたい」という“心の型”である。

先生方は、あまりにも忙しすぎる。次から次へとやるべきことが増えていく。きっと、もっとゆったりとできれば、昔の寺子屋の師匠のようなマインドが蘇ってくるはずである。何かに追われるように教育をするのではなく、先生方一人一人が持ち合わせている教育愛をもとにじっくりと一人一人の生徒と向き合えれば、状況は変わってくるはずである。

急に現状が改善されるわけではないが、少しでも先生方が教師魂をもとに愛情溢れる教育を展開できるようにお手伝いをしていきたい。